

JICA2006年度エコツアー研修コースの実施

2006年10月2日から11月10日まで、JICA集団研修「自然公園の管理・運営と利用」研修がJICA帯広国際センターを研修実施機関、KIWCを受け入れ機関として実施されました。集団研修として最終回となる今年度は、4カ国（ブータン、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ネパール、ルーマニア）6名の、観光や環境保全に係わる中堅行政官を迎えました。研修では東北海道の各自然公園を中心に、エコツアープログラムの体験実習や、自然公園制度、エコツアーの理念、環境教育現場の視察などを行いました。さらに京都・東京も訪れ、文化史跡を活用したエコツアーの事例についても学びました。研修員はこれらのプログラムを通して学んだことを活かした、自国におけるエコツーリズム導入と活用のためのアクションプランを企画し、研修の最後に発表しました。

1ヶ月を超す長い研修期間中には、ホームビジットや小学校訪問などの、市民との交流の機会も設けられました。閉講式には、滞在中に親しくなったホストファミリーも出席し、研修員とともに修了を喜びあいました。

なお、この研修の一部日程には、(財)自然環境研究センターの実施するマレーシア対象「参加型保護区・野生生物管理」研修参加者や、帯広畜産大学からのインターンシップ生も参加し、多人数による意見・情報の交換が活発に行われた、にぎやかなプログラムとなりました。



JICAモンゴル湿原生態系保全プロジェクト研修

2006年11月21日から12月1日にかけて、モンゴルのラムサール登録湿地・ウギノールの関係者4名を対象に研修を実施しました。ウギノールの環境・生態系保全のため、JICAが策定中の「集水域管理モデルプログラム」について、地域社会への普及・啓発を推進するための人材育成の一環として行われたもので、現地の村議会議長や担当の省庁職員などが参加しました。

関東・北海道を会場とする日程のうち、KIWCが北海道での研修を担当し、釧路地域の湿地やその関連施設等で実施されている湿地・生態系保全のための活動、特に地域社会への普及・啓発や官民の連携の事例が紹介されました。

なお、KIWCではウギノール保全のためのJICA事業として、2001年にも研修を、また2002年には鳥類と湿地の専門家の派遣を実施しています。



JICAをつうじた国際協力として、2006年度は上記の受託研修事業のほかにも、JICA東京国際センターや(財)自然環境研究センター等が実施した研修(対象国:パナマ・南ヨーロッパ諸国・マダガスカル・エクアドル)において、湿地保全に関するプログラムの提供をおこないました。

日本のラムサール条約登録湿地 シリーズ15 ～風蓮湖・春国岱～

「風蓮湖」は、根室半島の付け根にあり、その東北部には「春国岱」が隣接しています。風蓮湖・春国岱は、多様な自然環境を持ち、これまで280種以上の鳥類が確認され、多くの野生生物を支えるとともに、人の生活の場ともなってきました。

オホーツクの海流が砂を運び作り上げた細長い砂州「春国岱」は、オホーツク海と風蓮湖を隔てるように横たわっています。面積約600ha、最大幅約1.3km、先端まで約8kmほどになります。その中には、3つの砂丘があり海側から第一砂丘、第二砂丘、第三砂丘と呼ばれています。砂丘上には、多様な環境が存在し、草原、塩性湿地、湿原、針葉樹林、立ち枯れの林など、独特の景観を見せ、多様な動植物が生息しています。

また、北海道の湖としては、6番目の大きさを誇る風蓮湖は、漁業活動の場として利用されてきました。干潮時には、広大な干潟が広がり、アサリやホッキの手掘り漁が、冬期には、結氷した湖上に穴をあけ網をしかける氷下待ち網漁が行なわれています。アサリやホッキ漁では、漁期を定め、伝統的な手掘り漁で漁獲を制限しながら、いつまでも資源が残るよう配慮するワイズユースが実践されています。

風蓮湖・春国岱では、これまで5,000羽以上のオオハクチョウ、55,000羽以上のガンカモ類が確認されるなど、ラムサール条約湿地登録基準の5つを満たし、条約湿地に登録されました。

この風蓮湖・春国岱では、漁師の横20メートル程で、エサを獲るタンチョウが見られます。漁師には、それほど警戒もせずエサを探し続けるのです。風蓮湖・春国岱は、野生生物の重要な生息地であるとともに、人と生き物が共存する貴重な場所でもあるのです。

(根室市農林課自然保護係)



タンチョウのすぐそばで、手掘り漁をする漁師の姿が見られる。
(写真提供:財団法人 日本野鳥の会)

Issued by Kushiro International Wetland Centre

March 2007



KIWC newsletter

釧路国際ウェットランドセンター(KIWC)は、自然に恵まれた北海道・釧路地方を拠点に、地域の充実した施設・豊かな人的資源を活用する地域ネットワークです。地元に根ざした湿地保全のための普及啓発と国際協力活動を、積極的にすすめています。

CONTENTS

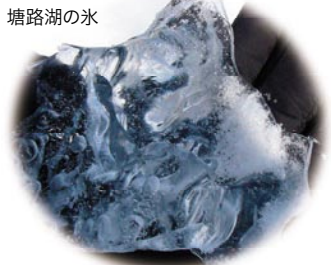
エコツアーの実施	1	姉妹湿地交流	3
英語版ガイドブックの発行	1	UNITAR研修ワークショップ開催	3
KIWC技術委員会の活動	2	JICA関連の事業	3-4
技術委員の韓国派遣報告	2	日本のラムサール登録湿地	4

湿原エコツアー「湧水と遺跡からみる釧路湿原」

地域住民を対象としたエコツアーを2006年12月10日に実施しました。22名で釧路町の細岡地区を訪れ、釧路湿原の周辺林から湧出した水が湿原に流れ込んでいる現場で、湧出量や水温の測定実験を行いました。小さな泉ひとつから、1日で10トン以上の水が湧き出していることに驚き、このような水が広い湿原を潤していることを実感しました。

また、縄文時代の遺跡にも足をのびし、竪穴式住居や貝塚を見学しました。雪におおわれた竪穴式住居の跡にしばたらずんで、気候が現在より温暖で、釧路湿原が大きな汽水湖だった当時の人々の暮らしに想いをめぐらせた。

小雪のちらつく寒い日でしたが、参加者は皆元気に森の中を歩き回り、白く雪化粧した木立や湿原の景色を楽しみました。最後に細岡ビジターズラウンジから温かい緑茶のサービスを受け、「湿原の水」をじっくり味わいました。



塘路湖の水



世界湿地の日記念「冬のエコツアー」

2月2日の世界湿地の日を記念し、2007年2月3日に冬の湿原を訪れる、地域住民対象のエコツアーを実施しました。釧路湿原の東側を走る期間限定のSL「冬の湿原号」で塘路湖に向かい、車窓から間近に見える釧路川の蛇行の様子や、冬の湿原の風景を楽しみました。23名が参加し、湖畔にてミズゴケ湿原の植物の冬越しの様子や、周辺林につくられたアオサギのコロニーを観察し、野生動物の足跡などを探しました。

その後結氷した湖上に出て、御神渡り(寒暖の差により、湖を横断するように生じる氷のせり上がり)や湖へ注ぐ湧水の観察を行いました。さらに湖で水揚げされたワカサギ唐揚げの試食や塘路湖エコミュージアムセンターの指導による氷の観察なども行いました。

周辺林から湖に流入する湧水や氷を見るだけでなく、音や冷たさも体験し、また、これらの水環境で育まれた魚を味わうなど五感をフルに活用して、今年の世界湿地の日のテーマ「漁業における湿地の役割」に参加者全員で考えました。



世界湿地の日(2月2日)

ラムサール条約(特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約)が採択された日(1971年2月2日)を記念して、条約の常設委員会により定められました。毎年「世界湿地の日」の前日には世界中の締約国で、湿地の大切さを広く人々に伝えるため、政府機関やNGOによるさまざまな催しが行われています。

英語版「釧路湿原ガイドブック」発行

釧路湿原の観光情報から動植物・気候・人との結びつきや保全のしくみまでを網羅した、英語版のガイドブック「Kushiro Wetland (A5版55ページ)」を2007年1月に刊行しました。2004年に釧路湿原国立公園連絡協議会より発行された「釧路湿原国立公園」の英語版にあたります。

1冊600円(税込)で一般販売しております。KIWC事務局(通信販売可)のほか、釧路湿原周辺の施設等で購入できます。詳しくは事務局までお問い合わせください。

インターネットからも購入申し込みができます(URL: <http://www.kiwc.net/>)。





KIWC技術委員会の活動

KIWCでは、湿地の保全と賢明な利用をより効果的に進めていくために、3ヵ年ごとに定めるテーマについて、専門家による技術委員会を組織し、調査・研究活動を行っています。3年間の研究活動は報告書にまとめられ、釧路地域の湿地保全と賢明な利用に関する事例資料として、関係機関等で広く活用されています。

2004－2006年度技術委員会報告書の発行

2006年度は、2004年度に始まったKIWC技術委員会活動「湿地の保全と賢明な利用のための広報・教育・普及啓発に関する調査・研究」の最終年度となりました。

3年間の活動のまとめとして、ラムサール条約の求める「CEPA：Communication（コミュニケーション）、Education（教育）、Public Awareness（普及啓発）」に着目し、地域の人々の湿地に対する理解を深め、その保全に対する意識を高めるための手法について、各委員が自ら実践している取り組みを紹介し、過去2年間に起こった事例研究をもとに提言をまとめました。これらの報告をおさめた「2004－2006年度活動報告書」は、2007年春に関係機関等に向けて配布される予定です。

KIWC技術委員・専門家の韓国派遣

2005年11月に開催された第9回ラムサール条約締約国会議において、次回の締約国会議は2008年に韓国で開かれることが決定しました。開催都市となる慶尚南道・昌原（チャンウォン）市では、さっそく自治体や報道の関係者らが、第5回締約国会議開催都市の釧路を訪れ、会議会場を視察するなど、開催準備のための情報収集活動が始まりました。

2006年12月にはKIWCより技術委員・専門家ら3名が昌原市に招かれ、市の主催による講演会での発表や、市内の湿地の視察をとおり、湿地保全活動における地域住民参加の重要性を、地元の関係者や市民に伝えました。



写真提供：ブサンニュース

～韓国・昌原市を訪れる～

KIWC技術委員 若山公一（釧路湿原温根内ビジターセンター指導員）

札幌で前泊して翌12月26日の午後、まだ秋模様感がする韓国金海空港に降り立った。ここから目的地の昌原市まで一時間足らずである。迎えにこられた市の職員から手渡されたスケジュール表には、講演を挟んで、注南（ズナム）貯水池の他数箇所の視察が予定されていた。昌原市の環境担当職員と懇談する機会も多く設けられ、ラムサール会議の開催地の先輩から様々なことを吸収したいとの意欲が随所に感じられた。

講演は野鳥のパネルが並べられた市民ホールで行われ、KIWCの新庄久志氏からラムサール条約の理念や釧路での会議の様子、釧路湿原の保護などを、私からは温根内の自然環境やボランティア活動などを紹介した。午後からは、市の最北部を流れる洛東江の浸透ろ過水を利用した最新の浄水場を見学、そして今回一番楽しみだった注南貯水池へと向かった。注南貯水池はガン・カモ類を中心に20種あまり数万羽の渡り鳥の中継・越冬地として知られており、2008年の会議での登録を予定している。野鳥の生態学習館と監視タワー、観察路が設置され、学校対象の観察会も行っているとのこと、通常専門員だけが使う監視タワーに登らせてもらい貯水池を一望、ヨシの陰で風除けしているヘラサギや波間に浮かぶカモ類などを観察でき、多くの野鳥にとって重要な湿地であることが十分実感できた。

夏には池一面がハスに覆われると聞く。渡り鳥の季節以外にも近くの白月山や馬金温泉などを結び散策コースを楽しめるなど観光面での魅力ももっている。この貯水池に自然観察や観光に利用できる木道を設置する計画を検討しているとの話もあって、温根内木道がヒントになったのか、具体的なアドバイスを何度も求められた。確かにハスの上を歩くような木道は想像しただけでも魅力的である。しかし、野鳥の生息に支障が生じる人工物の設置は極力避けるのが賢明、設けるにしても渡りの時期には撤去できる浮橋のような構造か、渡り鳥の利用水域を避ける等、十分な検討を重ねていきたい、そのような回答をした憶えがあるが、再訪した際に確認したいことの一つである。

最後の夜。ラムサール会議会議場となるコンベンションセンター見学の帰路、市庁舎前に飾られたクリスマスツリーと光のトンネルを皆でくぐり抜けた短い散歩とともに印象深い昌原市での日程を終えた。

訪韓したのは今回で二度目だが、共通して驚いたのは都市部のカササギと人のパワー、共通しての喜びは人との交流、来年10月三度目も同じような感想を味わいたい。自然環境だけでなく、日本文化とのつながりの深い歴史・文化遺産や、パンソリ・サムルノリなどの民族芸能を訪ねる楽しみもある。

最後に朴完洙市長をはじめ、崔洛善福祉環境局長、環境政策課職員の皆様、技術スタッフの皆様、通訳の姜珠利さんに深く感謝申し上げます。



注南貯水池を望む



注南貯水池生態学習館

姉妹湿地訪問団を歓迎

2006年4月21日に、姉妹湿地を抱えるオーストラリア・ポートステューブンス郡の姉妹都市委員会訪問団11名を歓迎し、釧路市との共催による歓迎レセプションを地元のホテルにて開催しました。釧路地域の国際交流団体や訪問団のホームステイ先のご家庭のほか、2005年に姉妹湿地のハンターウェットランズセンター*で開催された「渡り鳥がニューカッスルに帰ってくることを記念する国際展示会」に、釧路より作品を出品した子供達など、約80名が出席しました。

会場には2006年3月に開催された「国際ソル作品展」出品作品や、オーストラリアの市民ボランティアの手によるキルトなどが飾られ、出席者の目を楽しませました。

また、スライドショーによる湿地紹介や、郷土芸能の披露など、釧路地域の自然と文化を紹介するアトラクションなども行われました。

会場は終始なごやかな雰囲気、両国の参加者が談笑する姿があちこちで見られました。

*2005年にウェットランドセンター・オーストラリアからハンターウェットランズセンター・オーストラリアに名称が変わりました。



国連訓練調査研究所（UNITAR）研修ワークショップの共催

2006年8月27日から31日にかけて、UNITAR（国連訓練調査研究所）アジア太平洋地域広島事務所による研修ワークショップが、KIWCとの共催で実施されました。UNITARによる釧路での研修ワークショップとしては6回目の、UNITAR広島事務所の主催としては2回目の開催となります。

今回のワークショップでは「生態系、水と生物多様性」がテーマに定められました。水環境に着目した生態系と生物多様性の保全に関する知見や技術を習得するため、アジア・太平洋地域の開発途上国を中心に、27カ国44名の行政官や専門家が参加しました。

メイン会場となった釧路市観光国際交流センターでの講義や実習のほか、釧路湿原と阿寒湖を視察する1泊2日のフィールドツアーにて、ラムサール条約登録湿地の管理運営や利用の方法、地域住民とのかかわりなどの事例紹介も実施されました。参加者にはワークショップとその後のフォローアップにより得た知見を、自国でさらに普及・発展させる指導者となることが期待されています。

研修の合間には、地域文化団体等の協力により、釧路蝦夷太鼓と華道実演が披露され、海外からの参加者に大変な好評を博しました。



JICA2006年度湿地保全研修コースの実施

2006年5月22日から7月4日まで、JICA（国際協力機構）集団研修「湿地における生態系・生物多様性とその修復・再生及び賢明な利用」研修が、JICA帯広国際センターを研修実施機関、環境省自然環境局及びKIWCを受け入れ機関として実施されました。

集団研修として3回目の今年度は、6カ国（ドミニカ共和国、インドネシア、モンゴル、ソロモン、ベトナム、ザンビア）より環境保全や自然保護に係わる中堅行政官や専門家6名が参加しました。北海道の釧路湿原で始まった自然再生事業から、本州首都圏の干潟再生、沖縄のマングローブ湿地保全のための取り組みまで、日本列島を縦断しながら、多種多様な環境における湿地の保全・自然再生の事例について学びました。また、研修員は環境教育プログラムやエコツアーなど、湿地の自然資源の持続的な利用方法に関するさまざまな実習にも参加しました。

研修員達は滞在中、ホームビジットや、エコツアーや環境保全について学んでいる大学生との討論などを通じて、さまざまな市民と交流しました。



JICAメキシコ・ユカタン半島沿岸湿地保全計画カウンターパート研修

2006年6月27日から7月28日にかけて、メキシコ・ユカタン州リア・セレストン生物圏保護区の専門家2名が、エコツーリズムや漁村を中心とした自然環境の持続的利用について学ぶため来日しました。この研修はJICAが2003年よりこの地で推進中の、湿地・生態系保全プロジェクトの一環として実施されたものです。KIWCからも2005年に湿地保全の専門家を派遣し、湿地保全のための「モニタリング手法」等の指導を行いました。

KIWCでは日本各地を回る日程のうち、北海道を会場とする7月16日から25日の研修を受託しました。釧路湿原や霧多布湿原で実施されているエコツアープログラムや、地元の漁師さんの指導による「番屋での魚料理体験」などの体験実習をつうじて、特に地元産業と結びつきの深いエコツアーの事例を紹介しました。

